

# 魚見里前遺跡発掘調査報告

2006（平成18）年11月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

私たちの生活の糧を生み出す田畠、その生産性を高めるため、農業の発展を祈念して各地で鋭意圃場整備が進められてきました。

三重県埋蔵文化財センターと三重県教育委員会では、事業予定地内の埋蔵文化財の保護とその取り扱いについて、三重県農水商工部をはじめ関係機関と協議を重ねてきました。その結果、現状保存が困難な遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなりました。

本書は、平成14年度に発掘調査を行った魚見里前遺跡の発掘調査報告です。文化財保護の一助として、皆様にご活用いただければ幸いです。

なお、文末ながら調査にあたり、ご理解とご協力をいただいた三重県農水商工部農業基盤室ならびに松阪農林商工環境事務所、機殿下土地改良区、櫛田川・祓川沿岸土地改良区、松阪市教育委員会をはじめ、地元の方々に大変お世話になりました。心からの感謝を申し上げます。

平成18年11月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫



## 例　　言

- 1 本書は、三重県松阪市魚見町字里前に所在する魚見里前遺跡発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本遺跡の調査は平成14年度県営ほ場整備事業（機殿下地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施した。
- 3 平成14年度調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調整担当 企画調整グループ 主査 森山直樹

調査担当 調査研究グループ GL 兼主幹 山田 猛

臨時技術補助員 小林俊之

発掘作業委託 株シードコンサルタント

調査期間 平成14年9月30日～11月29日

調査面積 800m<sup>2</sup>

- 4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、松阪地方県民局農林商工部、機殿下土地改良区、柳田川・祓川沿岸土地改良区、松阪市教育委員会からの協力を得た。
- 5 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究グループおよび情報普及グループ（平成17年度まで）、調査研究Ⅰ課（平成18年度）が行った。調査区及び遺構の写真撮影は小林が行い、遺物の写真撮影は五嶋史佳が行った。また本文の執筆は五嶋・小林が行い、執筆の分担は目次と文末に明記した。全体の編集は小林が行った。
- 6 現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々・機関から有益な御教示を受けた。  
(順不同・敬称略)  
小林秀（三重県生活部文化振興室県史編さんグループ）、松葉和也（松阪市教育委員会）、宝積寺
- 7 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。  
わん………「椀」「碗」「塊」があるが、「椀」を用いた。  
つき………「杯」「杓」があるが、「杯」を用いた。
- 8 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　　例

### <地図類>

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪市都市計画図である。
2. これら地図類は、国土調査法の日本測地系による座標第VI系（旧国土座標）で表現されているため、平成14年から施行されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
3. 挿図の方位はすべて旧国土座標による座標北で示している。なお磁針方位は西偏6°40'、真北方位は西偏0°17'34"（平成10年）である。

### <遺構類>

4. 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点破線で表現している。また遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層面よりも太い線で表現した。
5. 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版）を用いた。
6. 当報告書での遺構は通番となっているが、SD 1～4について、調査時には遺構の扱いであつたが自然落ち込みと判断したため、当報告書では欠番としている。
7. 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号をついている。  
SD……溝 SK……土坑 SZ……不明遺構

### <遺物類>

8. 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本とし、通番となっている。
9. 遺物観察表は、以下の要領で記載してある。  
報告番号…挿図掲載番号である。  
実測番号…実測段階の登録番号である。  
種類…遺物の種類を示す。  
器種など…遺物の器種を示す。  
調査区…Ⅰ～Ⅲまでの地区を表す。またⅠ・Ⅲ地区はさらに1～3まで的小地区に分かれる。  
地区（グリッド）…調査時に設定したグリッド名を記した。  
出土位置・層位…遺物の出土した遺構や層名を記した。  
計測値（cm）…遺物の法量を示す。口径は口縁部径、器高は遺物の高さ、底径は底部径、高台径は高台部径を示す。なお数値はそれぞれの部位の実測段階の接地点で計測した。  
調整・技法の特徴…主な特徴を内面（内：）・外面（外：）で示した。  
胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。  
色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。  
残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示した。全体が残っているものは完存と記した。
10. 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図報告書番号と対応している。
11. 遺物の写真図版は、縮尺不同である。

# 本文目次

I	前言	.....	(五嶋)	1
1	調査に至る経過	.....		1
2	調査の経過と法的措置	.....		1
3	調査と記録の方法	.....		2
II	位置と環境	.....	(五嶋・小林)	4
1	地理的環境	.....	(五嶋)	4
2	周辺の遺跡など	.....	(小林)	4
3	魚見御厨	.....	(小林)	6
4	宏徳寺	.....	(小林)	6
III	層位と遺構	.....	(五嶋・小林)	7
1	I 地区	.....	(五嶋・小林)	7
2	II 地区	.....	(五嶋・小林)	7
3	III 地区	.....	(五嶋・小林)	13
IV	遺物	.....	(小林)	17
1	弥生時代・古墳時代	.....		17
2	I 地区	.....		17
3	III 地区	.....		19
4	その他	.....		19
V	調査のまとめ	.....	(小林)	22
1	魚見里前遺跡の旧地形	.....		22
2	遺構・遺物について	.....		22
3	川島町・魚見町の集落遺跡	.....		22

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 .....	3
第2図 遺跡位置図 .....	5
第3図 I 地区遺構平面図 .....	8
第4図 I - 1・2 地区調査区西壁土層断面図① .....	9
第5図 I - 1・2 地区調査区西壁土層断面図② .....	10
第6図 I - 3 地区調査区西壁土層断面図 .....	11
第7図 II 地区調査区土層断面図 .....	12
第8図 II 地区遺構平面図 .....	13
第9図 III 地区遺構平面図 .....	14
第10図 III 地区調査区土層断面図 .....	15
第11図 出土遺物実測図① .....	17
第12図 出土遺物実測図② .....	18
第13図 鎌倉時代の遺構の拡がり .....	24
第14図 室町時代の遺構の拡がり .....	25

## 挿 表 目 次

第1表 遺構一覧表 .....	16
第2表 遺物観察表① .....	20
第3表 遺物観察表② .....	21

## 写 真 図 版

写真図版 1	I - 1・2 地区調査区全景	写真図版 7	III地区 S D 5・S D 6
	I - 1 地区調査区全景		III地区 S D 7
写真図版 2	I 地区 a 2～3 区付近調査区西壁土層断面状況	写真図版 8	III地区 S D 11
	I 地区土器群 1 遺物出土状況		III地区 S D 12
写真図版 3	I 地区土器群 2 遺物出土状況	写真図版 9	III地区 S D 15
写真図版 4	I - 3 地区調査区全景		III地区 S K 13
	I 地区 a 47～48 区付近調査区西壁土層断面状況	写真図版 10	遺物写真①
写真図版 5	II 地区調査区東部全景	写真図版 11	遺物写真②
	II 地区西部全景		
	II 地区 n 6 区付近調査区南壁土層断面状況		
写真図版 6	III - 1 地区調査区全景		
	III - 2 地区調査区全景		
	III - 3 地区調査区全景		

# I 前 言

## 1 調査に至る契機

ここで報告する調査記録は、平成14年度県営は場整備事業（機殿下地区）に伴って発掘調査したものである。当事業による発掘調査は、「川島遺跡（第1次）」「川島遺跡（第2次）・東久保北浦遺跡・魚見下起遺跡」に続くもので、最終年次となる。

この地域に平成14年度県営圃場整備事業（機殿下地区）が行われることとなり、平成12年9月26日～10月5日に調査第一課技師伊藤裕偉（所属は当時）を担当者として東久保北浦遺跡、川島遺跡門前地区、魚見下起遺跡、魚見里前遺跡を対象に範囲確認調査を行った<sup>3)</sup>。

調査は37ヶ所の確認坑（魚見里前遺跡部分）を設定して行われた。その結果18,200m<sup>2</sup>について遺構が存在するものと判断した。

これを受けてその後関係部局と協議を重ねた結果、平成14年度事業予定地内については、工法を変更することにより遺跡の保存に努め、800m<sup>2</sup>については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

## 2 調査の経過と法的措置

### （1）調査経過概要

調査の設備準備、現地作業員雇用や安全管理面の作業は民間発掘会社に委託することとなり、平成14年9月2日に入札を実施。その結果（株）シードコンサルタントが落札し、9月6日に契約を締結した。

調査区の現況は水田または畑地で、耕作土と水田の床土等を重機で除去し、人力により包含層の掘削と遺構の検出、掘削を行った。その際の現地調査作業では、以下の方々にご協力いただいた。ここに御名を記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

野田仁、西岡玉次、西岡玉巳、西岡弘、西岡恒三、田畠武夫、田畠きみ、西岡まさ、西岡八重、山川よしひへ、西野みさこ、前田忠雄、田畠文子、小牧栄子、岡出秋美、鈴木てい、浦井郁江、山下テルミ、西野義夫

### （2）調査日誌抄

調査の経過に関しては以下の通りである。

2002年

- 9月10日 現地協議。  
9月20日 シードコンサルタントと打ち合わせ。  
10月3日 表土掘削開始。  
10月7日 昨日の大雨により調査区水没。  
10月8日 I地区包含層掘削、遺構検出。  
10月18日 II・III地区耕作土除去。  
10月24日 II地区全面遺構掘削。I地区埋め戻し。  
10月28日 I地区遺構検出、掘削。  
10月30日 I地区遺物検出状況の写真撮影。  
10月31日 I地区写真撮影。平面図実測。  
11月7日 I地区遺構平面図、土層断面図。  
11月11日 I地区完了。  
11月12日 II地区全景写真撮影。III地区表土掘削。  
11月13日 II地区遺構平面図、土層断面図完了。  
11月15日 II地区埋め戻し完了。  
III地区包含層掘削、遺構検出開始。  
11月26日 全景、遺構、土層断面写真撮影。  
11月27日 遺構平面図、調査区土層断面図完了。  
11月28日 III地区埋め戻し。  
11月29日 調査終了。現場撤収。

### （3）文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行っている。

- ・三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて）  
平成14年6月6日付け教委第12-173号（県知事通知）
- ・文化財保護法第58条の2第1項（文化庁長官あて）  
平成14年9月27日付け教理第183号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）  
平成14年12月19日付け教委第12-6-6号（県

### 3 調査と記録の方法

#### (1) 地区設定

調査区は大きく3ヶ所にわけられる。北から順に調査することとし、調査順にI～III地区（調査時はA～C地区）の名称を与えた。

また調査区内における地区割（グリッド）は4m方眼で設定しており、西から東へアルファベットを、北から南へ数字を与え、各北西角をグリッド名称とした。なおこの地区設定は任意のものであり、旧国土地標や世界測地系（ITRF、GRS-80）とは合致しない。

#### (2) 出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、グリッド単位で取り上げている。

#### (3) 遺構カード・遺構略測図

遺構検出段階で、「遺構カード」として縮尺40分の1の略測図を作成した。これは前述の地区（グリッド）毎に作成するもので、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを明示している。遺構番号については、土坑などは遺跡全体の通し番号とし、ピットについては地区毎の通し番号をつけることとした。またこの遺構カードを基にして縮尺100分の1の略測図を作成した。

#### (4) 写真撮影

遺構の写真撮影は原則として4×5判・6×9判（モノクロ・カラーポジ）を、補助的に35ミリカメラを使用した。使用したカメラは、ウィスタフイルド、ニコンFM2である。使用したフィルムはフジNEOPAN ACROS100・120・135、フジPROVIA100・120・135である。

遺物の写真撮影は6×9判（モノクロ）で撮影した。使用したカメラはTOYO-VIEW G IIである。使用したフィルムはフジNEOPAN ACROS120である。

#### (5) 遺構実測

遺構実測図については縮尺20分の1、遺構密度の低い部分は縮尺50分の1手書き実測を行った。遺構実測図の基準点は旧国土地標に基づいている。土層断面図については縮尺20分の1手書き実測を行った。  
(五嶋史佳)

#### 【註】

①このうち東久保北浦遺跡、川島遺跡門前地区、魚見下起遺跡については平成13年度に本調査を実施している。（柴山圭子「川島遺跡群（第2次）ほか発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、2004年。））



第1図 調査区位置図 (1 : 5,000) (■は試掘坑)

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

魚見里前遺跡<sup>④</sup>は、松阪市の東部に位置し、柳田川下流域右岸の柳田川低地と呼ばれる沖積地に立地する。JR紀勢本線が横切るあたりから柳田川と支流祓川が分流し、その二河川に挟まれる形で遺跡が存在する。祓川流域の自然堤防は、おもに砂礫からなるもので、規模も大きく、旧河道との比高も2m以上で段丘状の様相をみせる。それに対して現在の柳田川に沿って発達する自然堤防は、祓川に比べて規模・比高とも小さくなり、流路沿いに発達するだけである<sup>⑤</sup>。

調査区は、北端を県道松阪伊勢線に接し、魚見集落の東と南の水田地帯に位置する。

行政区上は、松阪市魚見町字里前に属する。

(五島)

### 2 周辺の遺跡など

周辺遺跡についての概要是、『川島遺跡群第1次発掘調査報告』で触れたので、詳細はそちらに拠られたい<sup>⑥</sup>。ここでは、魚見里前遺跡に関わる遺跡等について触れたい。

#### (1) 川島遺跡群

川島遺跡<sup>⑦</sup>は、魚見里前遺跡の北側に隣接し、柳田川流域右岸の沖積平野に位置している。遺跡の立地としては、沖積平野中の微高地に営まれた遺跡である。これまで2回の発掘調査では、ほとんどが幅2~3mの調査区であるが、合計7,200m<sup>2</sup>を発掘調査し、主に奈良時代から近世にかけての集落跡が見つかっている<sup>⑧</sup>。特に、鎌倉・室町時代の造構・遺物が多く、室町時代が最も多い。また、この付近一帯に複雑にあったと思われる流路跡も多数検出しており、その流路からは完形の山茶椀など多数の遺物が出土している。川島町は旧魚見村に属し、後述する造構のあり方等を考えると、魚見里前遺跡との関連性は高いだろう。さらに詳細な成果は、V章で触れ

たい。

#### (2) 古代の官道・中世の道・近世の街道

当地の南東方約3kmには、国史跡斎宮跡<sup>⑨</sup>がある。斎宮跡地内には、古代より官道が通る<sup>⑩</sup>。この官道は、斎宮を経由して神宮へ向かうものであり、これを基に近世の伊勢街道（参宮街道）も成立する。特に、近世の街道は位置が明確である。

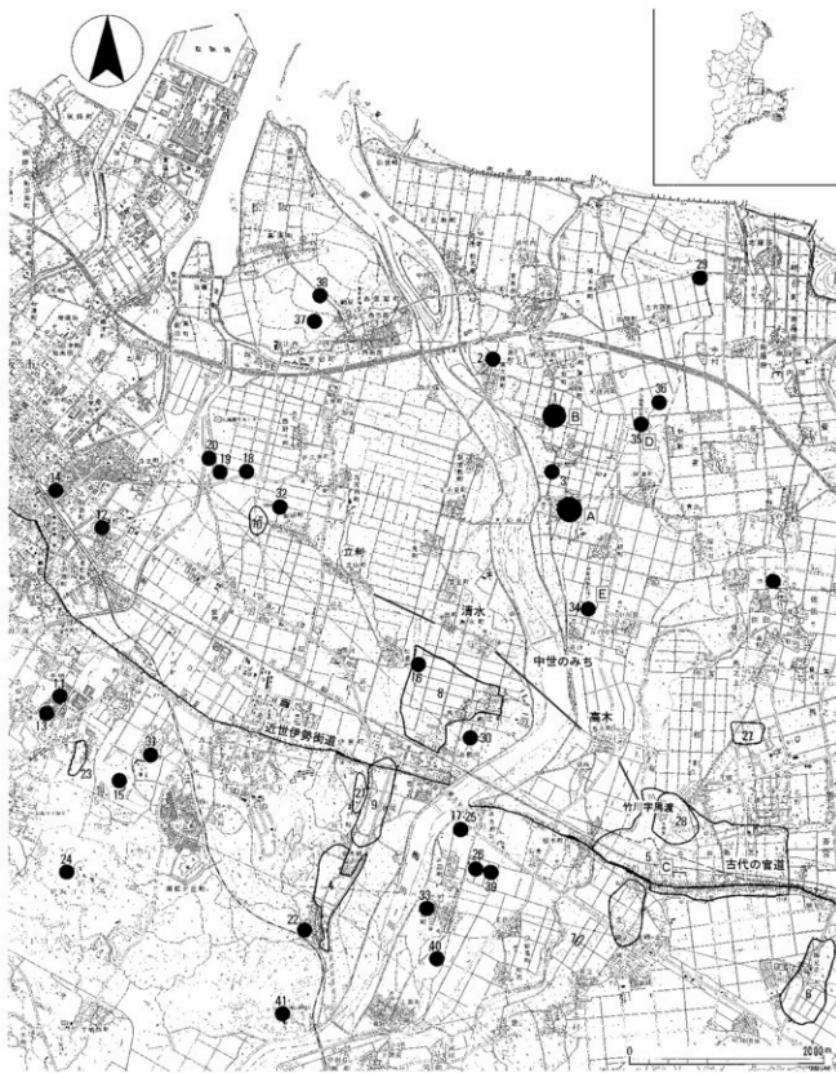
中世のみについても研究がされており、魚見里前遺跡近辺である柳田川渡川部分も推定されている。高木門や清水橋の存在が史料上で確認できるため、高木門→清水町という地図に示したようなルートが想定されている<sup>⑪</sup>。魚見里前遺跡は、このルートより約2km北方に位置する。

#### (3) 神服織機殿神社・神麻績機殿神社

魚見里前遺跡の東方に2つの神社がある。神服織機殿神社（下機殿）<sup>⑫</sup>と神麻績機殿神社（上機殿）<sup>⑬</sup>である。この2社は、伊勢神宮内宮に奉る神御衣を織る機殿の守護神で、古代以来の神とされる。現在でも、毎年5月と10月の14日に内宮と別宮の荒祭宮で行われる神御衣祭には、神服織機殿神社で織られた和布（綿布）と、神麻績機殿神社で織られた荒妙（麻布）が納められる<sup>⑭</sup>。

この2社がいつ頃からあったかは定かではないが、『延喜式』の神衣条には「服部等造二時神衣機殿祭並雜用料」「麻績等機殿祭並雜用料」とあり<sup>⑮</sup>、平安時代にこの2社の存在が知られる。また、『神宮雜例集』には「神服機殿在多氣郡波田郷麻田村」や「麻績機殿在同郡井手郷」とある<sup>⑯</sup>。『神宮雜例集』の編纂年代は、鎌倉時代初期である建仁2（1202）年から承元4（1210）年の間と考えられているため<sup>⑰</sup>、13世紀初頭以前には、現在地もしくは近辺にあったことが推察できる。

魚見町や川島町は現在、機殿地区と呼ばれる。当時の開発とこの2社が関わっている可能性もあるだろう。



川島遺跡群の周辺遺跡（番号は第2図の番号と一致する。）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	川島遺跡群	7	寺垣内遺跡	13	久保古墳	19	丸山古墳	25	古賀通り古墳群	31	貴田寺庵寺
2	西出遺跡	8	鶴田地区内古墳群	14	茶臼山古墳	20	鹿塚古墳	26	中の坊遺跡	32	朝田寺
3	魚見下起遺跡	9	琵琶垣内遺跡	15	坊山1号墳	21	天王山古墳群	27	坂本古墳群	33	梶地西ノ知遺跡
4	山添遺跡	10	堀町遺跡	16	漸千遺跡	22	山添古墳群	28	塚山古墳群	34	神則織機般神社
5	斎宮跡	11	草山遺跡	17	古賀通りB遺跡	23	稚現山古墳群	29	南山遺跡	35	神則織機般神社
6	北野遺跡	12	浦早崎遺跡	18	大塚山古墳	24	西野町古墳群	30	大雷寺庵寺	41	神山城跡
										36	服部遺跡

第2図 遺跡位置図（国土地理院「松阪港」「松阪」「明野」1:25,000より作成）(1:50,000)

### 3 魚見御厨・御園

御厨・御園とは、簡単に言えば伊勢神宮領のこととされるが、その実態については不明な点が多い。実際、他の寺領莊園のようなものであったのかどうかも定かでない。その御厨・御園関係で「魚見」の名はたびたび史料上に見られる。

『神宮雜例集』には、「魚見東御園」・「魚見新御園」の名が見える<sup>①</sup>。『神宮雜例集』の編纂年代は前記のように考えられているため、御園は既に13世紀初期にはあったことが推察できる。また、すでに東・西及び新御園に発展分化していることも推察できる。『神鳳鈔』にも内宮領として同様に「魚見東御園」の名がみえる<sup>②</sup>。

『内宮引付』文明4年（1472）10月10日付けの内宮荒祭宮役人等言上状にも「魚見御厨」とある。この魚見御園（園）と魚見御厨は同一のものか定かではない<sup>③</sup>。

なお、『氏経卿引付』享徳元年（1452）8月3日付内宮序宣に「魚見郷内深田御園」が見られる<sup>④</sup>。現在の魚見町や川島町で「深田」の小字や地名は確認できず、詳細については不明な点が多い。

### 4 宏徳寺

宏徳寺は、松阪市川島町にて古くより伝えられる寺院である。地元では、「七堂伽藍の大寺院であった」や、「織田信長勢の焼討にあった」等の伝承があり、宝積寺（魚見町所在）では、光（宏）徳寺が北畠大納言の祈願所であったことが伝えられている<sup>⑤</sup>。

この宏徳寺は、いくつかの史料上で確認できる。

『宮田宏徳寺旧記』では、貞治5（1366）年10月には「太神宮領多氣郡服部郷内萱野領田畠等」「長田新御園内田畠」「飯野郡若菜御厨領家職田畠等」の3カ所を寺家當知行としていることがある。また、応永7（1400）年7月18日条には、大御所（室町幕府將軍足利義持か）から祈願寺とする旨の書状がある。応永19（1412）年6月2日条には、末寺があることをも書かれている<sup>⑥</sup>。これらの内容からは、宏徳寺が、伝承のとおりかなり大規模な寺院であったことが推測できよう。

『言維卿記』では、永禄元年（1558）8月16日条には澤路隼人佑を宏徳寺への案内に遣わしたことが、翌日条では安徳寺（宏徳寺の間違いか）に徳源があつたことが記されている。17日条では、長老や藏主がいたこと、西専庵などがあつたことが記されている。また、永禄3年3月12日条にも、「魚三の宏徳寺」と名前が見られる<sup>⑦</sup>。

川島遺跡群第1次調査道場I地区では、16世紀代の掘立柱建物跡や区画溝らしき遺構が検出されており、地籍図の検討も合わせた結果、宏徳寺の場所や範囲が推定されている<sup>⑧</sup>。  
(小林俊之)

#### 【註】

- ①『松阪市史』第一巻 史料編 自然（松阪市 1977年）。
- ②小瀬学・小林俊之『川島遺跡群（第1次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）。
- ③小瀬学・小林俊之『川島遺跡群（第1次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）。
- 柴山圭子『川島遺跡群（第2次）ほか発掘調査報告報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004年）。
- ⑤杉谷政根「古代官道と斎宮跡について」『研究紀要』第6号、三重県埋蔵文化財センター、1997年)、等
- ⑥伊藤裕伸「中世後期における斎宮の交通路と開所」『斎宮歴史博物館研究紀要』12、斎宮歴史博物館、2003年)。
- ⑦中井彦彦編『三重県の地名』（平凡社、1983年）。
- ⑧『言嘉式』
- ⑨『神宮雜例集』（群書解題）一上)。
- ⑩『神宮雜例集』（群書類従）神祇部。
- ⑪『内宮引付』（三重県史 資料編 中世Ⅰ（上））三重県、1997年)。
- ⑫『氏経卿引付』（三重県史 資料編 中世Ⅰ（上））三重県、1997年)。
- 宝積寺での聞き取り調査による。
- ⑯『宮田宏徳寺旧記』（松阪市史第3巻 史料編 古代・中世）松阪市、1980年)。
- ⑰『言維卿記』（続群書類従刊行会、1998年)。
- ⑱前掲<sup>⑮</sup>文献。

### III 層位と遺構

調査区は、魚見町集落の東と南の水田地帯でI～III地区の全3地区を調査した。調査の結果、I・II地区では遺構は検出できなかった。III地区では鎌倉時代から江戸時代までの土坑、溝等を検出した。以下、地区別に記述する。

#### 1 I 地区

##### (1) 基本層序

I地区では、現代の耕作土、床土、旧耕作土を取り除くと、にぶい黄橙色シルト（第4～6図15層）が見られた。調査時には、この上面にて検出を試みたが、明確な遺構はなく、落ち込みを数箇所確認したに過ぎない。このにぶい黄橙色シルトには山茶椀等の主に中世前期の遺物を含んでいる。落ち込みの部分には、にぶい黄橙色シルトのほか地面上に灰白色あるいは明赤褐色、褐色の粘土層がある。地山は灰白色の砂礫層であり、これより下では遺物は出土していない。

なお、この中には、耕作土状のものと床土状のものが交互に重なり合う層位が見られた。いずれにもにぶい黄橙色シルト上に見られ、旧田面とも考えられる。落ち込み部の底部にも同様の層位（第5図26～29層あたり）があるため、貯水の状況がある場合には旧田面状の堆積をするのかもしれない。

##### (2) 遺構

旧耕作土下の地点で、山茶椀等の遺物を含んだ沖積地特有のにぶい黄橙色シルト層（調査時には褐色シルト）が見られ、この面で検出を試みた。遺構が検出されなかったので、さらに掘り下げたところ遺物の集中する地点（土器群）を2箇所確認した。それ以外には遺物の量は少なく、その下の層は灰色砂礫層となるため、褐色砂層を検出した時点での完掘とした。

**土器群1** I-1地区のb2区で確認された。径0.5mほどの範囲に集中しており、出土遺物には土師器皿と山茶椀があり、山茶椀は正位に近い状態で出土し

た（写真図版2）。遺構検出できなかつたが、なんらかの遺構であったことも考えられよう。

**土器群2** I-1地区b18区付近で確認された。第3図のトーンの範囲に土師器皿や山茶椀が多数出土した（写真図版3下・4）。これも検出時には確認できなかつたが、なんらかの遺構であった可能性もある。

**その他** 調査時には数箇所確認した落ち込みを遺構と判断したため、遺構番号をSD1～4まで付与した。土器群はあるものの、本報告では自然落ち込みとし、遺構番号1～4については欠番とした。

#### 2 II 地区

##### (1) 基本層序

現代耕作土、旧耕作土を取り除くと、I地区同様にぶい黄橙色シルトが見られる。I地区同様この層の上面で検出を試みたが、遺構を確認することはできなかつた。にぶい黄橙色シルトの下には、灰白色シルト、黄橙色粘土質土、黄褐色粘土質土の順に堆積が確認できる。その下には、青灰色砂や灰色砂礫が見られ、これを地山とした。

##### (2) 遺構

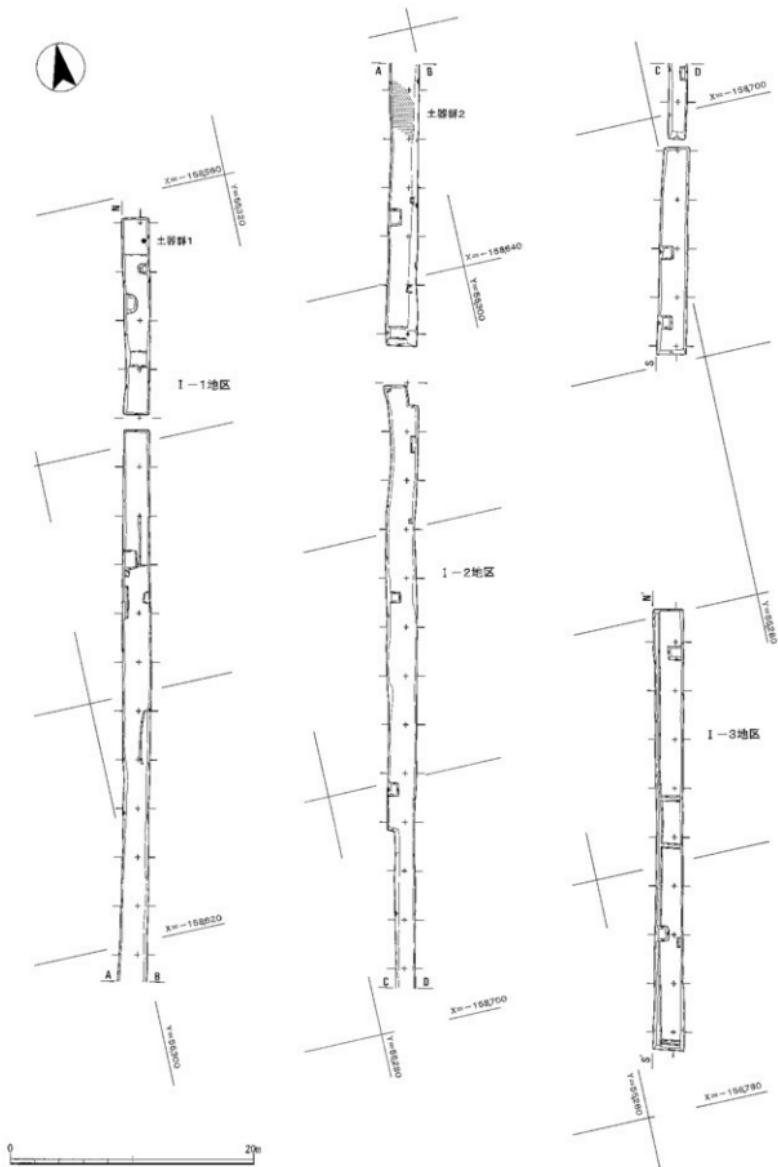
前項で述べたように、にぶい黄橙色シルト層上で検出されたが、遺構は見られなかつた。さらに40cm掘り下げた所の灰白色シルト層から山茶椀片が出土したが、遺構は検出できなかつた。

#### 3 III 地区

##### (1) 基本層序

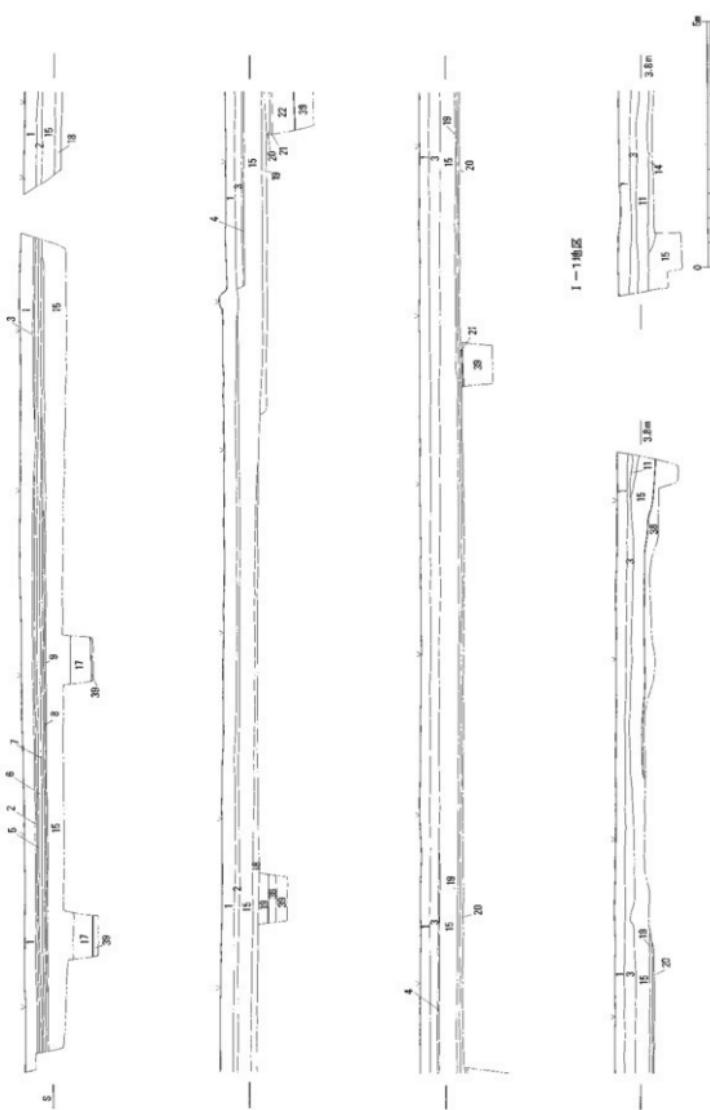
III-1地区では、現代耕作土、旧耕作土、旧床土を取り除くと、褐色砂質土があり、この上面で遺構が見られたため、ここを検出面とした。褐色砂質土の下には砂層が見られ、遺物の出土もなかつたため、褐色砂質土を地山と判断した。

III-3地区では、現代耕作土、床土、旧耕作土を取り除くと、黄灰色砂層・灰白色砂礫層があり、こ

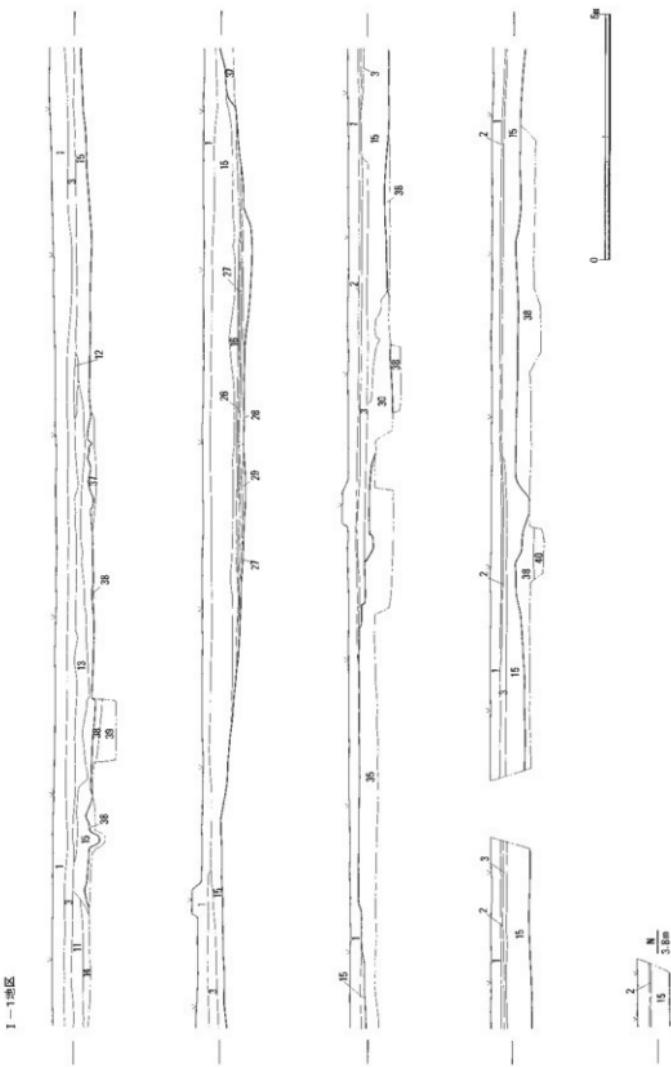


第3図 I地区遺構平面図 (1 : 400)

I - 2 地区

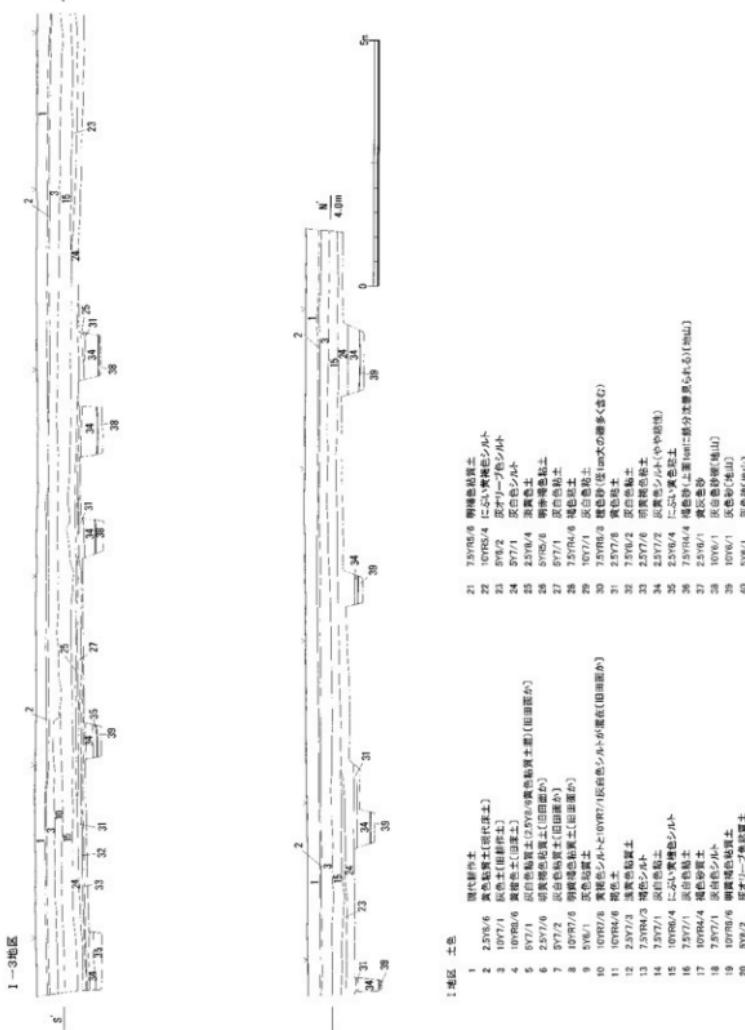


第4図 I - 1・2地区調査区西壁土層断面図① (1 : 100)

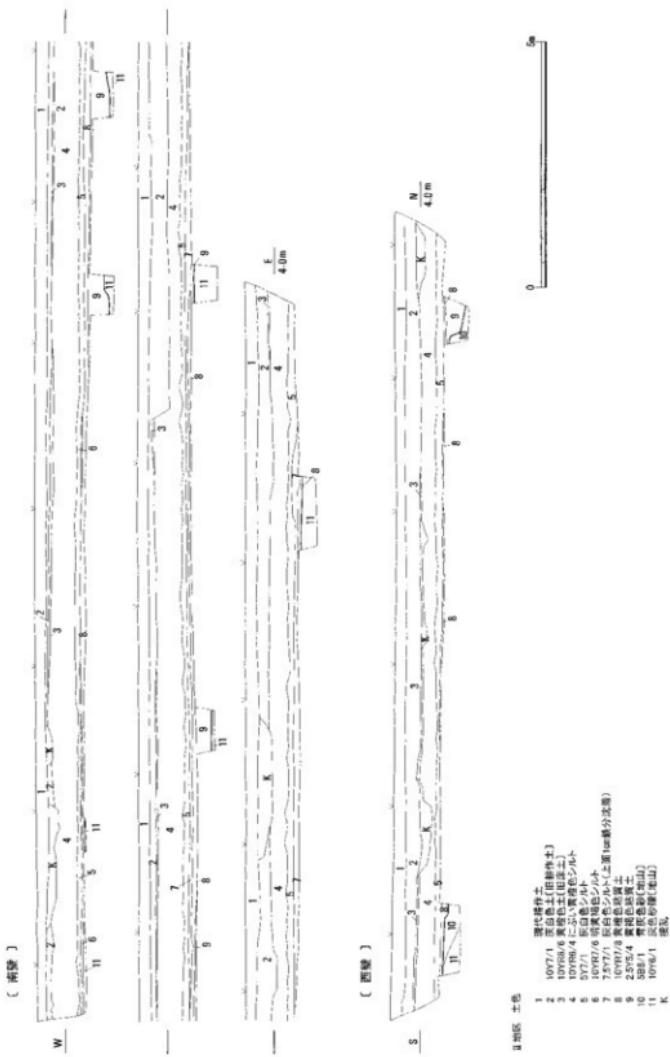


第5図 I-1・2地区調査区西壁土層断面図②(1:100)

## I-3地区



第6図 I-3地区調査区西壁土層断面図 (1:100)



第7図 II地区調査区土層断面図 (1:100)

の上面で遺構が見られたため、ここを検出面とした。砂層はⅢ-1地区の褐色砂質土の下に見られた砂層である。この砂層・砂礫層には遺物は含まれず、地山と判断した。

## (2) 遺構

平安時代の溝1条、鎌倉時代の溝4条、室町時代の溝1条を確認した。その他に時代を特定できなかったものの土坑3基、溝2条などを検出した。

### （平安時代の遺構）

#### 溝

SD 5 Ⅲ-1地区d・e7～11区で検出した溝である。調査区内では、コの字形に検出した。幅は1.2m以上、深さは15～30cmである。途中SD 6によって攪乱される。

クロロ土師器皿、土師器甕、須恵器小片等が出土しており、12世紀代くらいの遺構と考えられる。

### （鎌倉時代の遺構）

#### 溝

SD 6 Ⅲ-1地区d・e10区で検出した溝である。幅は0.6m、深さは0.5mである。切り合ひ関係からSD 5より後行する。

土師器小片や山茶椀片の出土があり、12～13世紀

代の遺構と考えられる。

SD 9 Ⅲ-2地区h14区で検出した溝である。幅は0.4m、深さは25cmである。

土師器鍋片の出土があり、12～13世紀の遺構と考えられる。

SD 12 Ⅲ-3地区i22・23区で検出した溝である。幅は0.8～1.2m、深さは0.4mである。埋土は褐色砂質土（礫混じり）である。

土師器皿片が出土しており、12～13世紀の遺構と考えられる。

#### 落ち込み

SD 8 Ⅲ-2地区d～h14区で検出した。幅は1.3mである落ち込み状の遺構である。調査区の幅が狭いため、全体の形状は不明である。深さは5～10cmしかない。

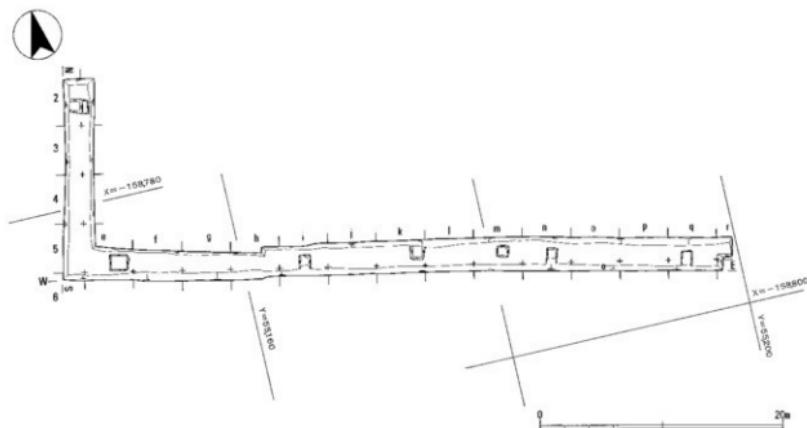
出土遺物には、土師器小片や山茶椀があり、中世前期に埋没しているものと考えられる。

### （室町時代の遺構）

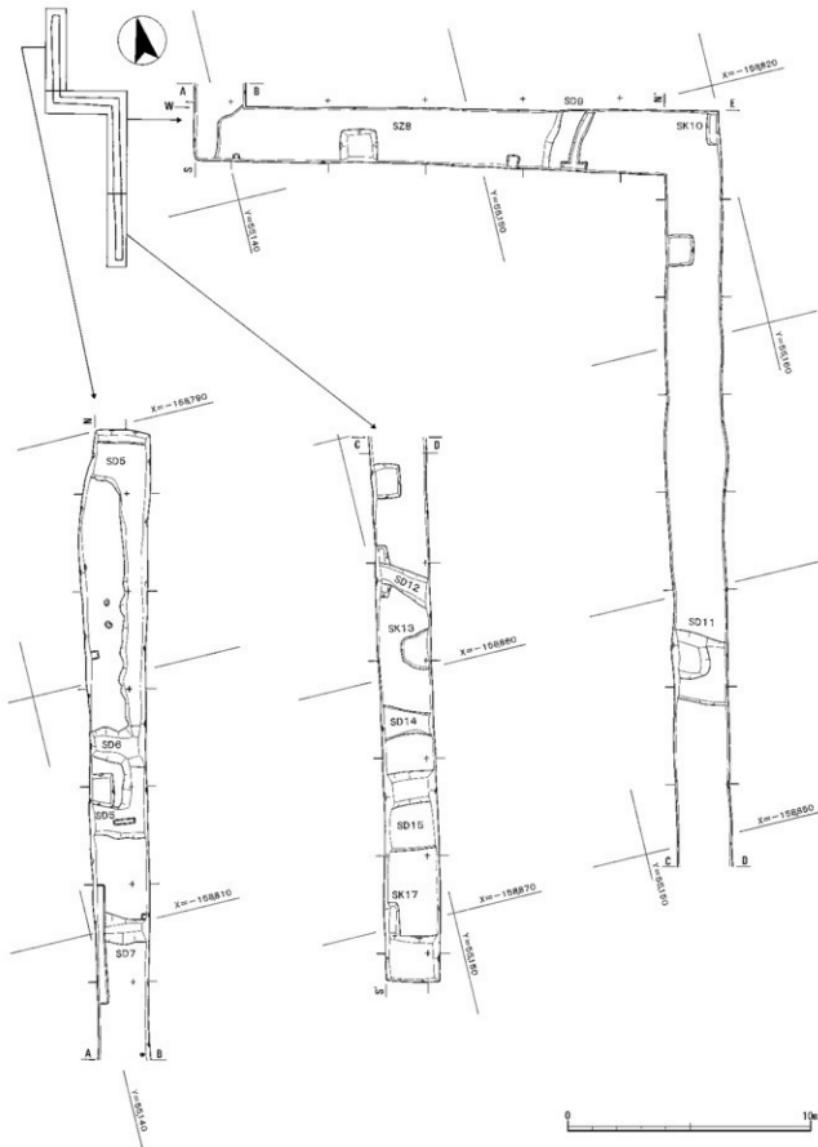
#### 溝

SD 11 Ⅲ-3地区i19・20区で検出した溝である。幅は2.5m、深さは0.2mである。部分的に15cmほど低くなっている箇所がある。

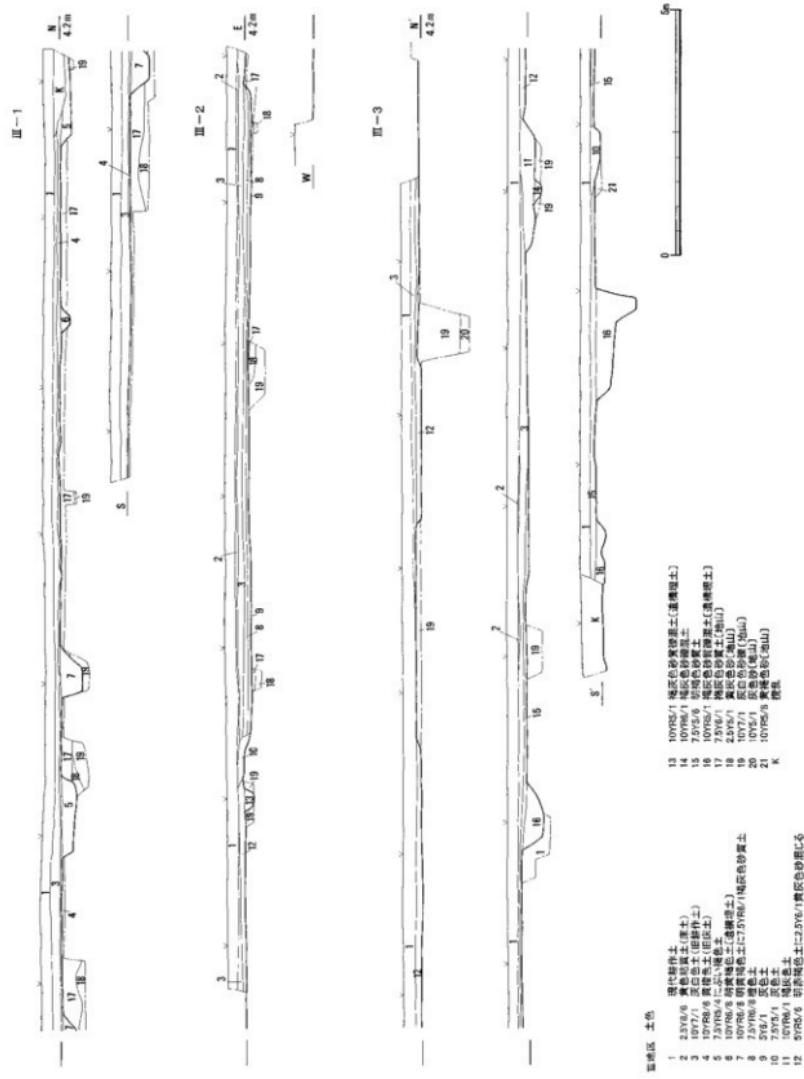
器壁の薄い土師器片や天目茶椀片等が出土してお



第8図 II地区遺構平面図 (1:400)



第9図 III地区造構平面図 (1 : 200)



り、15～16世紀代の遺構と考えられる。

S D 15 III-3 地区i・j25区で検出した溝である。

幅は3.2m、深さは0.4～0.8mである。埋土は褐灰色砂質土（礫混じり）の一層のみであり、北半は南半よりさらに30～40cm深くなっている。

器壁の薄い土師器皿が出土しており、16世紀代に埋没した遺構と考えられる。

#### （その他）

##### 土坑

S K 10 III-2 地区k14区で検出した土坑である。規模は0.5×1.3m以上で、深さは0.2mである。大半が調査区外であるため、全体の形状は不明である。

土師器片が出土しているが、いずれも小片であるため、時期は不明である。

S K 13 III-3 地区i23・24区で検出した土坑である。規模は南北1.5m、東西1m以上で、深さは0.1mである。

土師器や陶器が出土しているが、いずれも小片であるため、時期は不明である。

S K 17 III-3 地区i26区で検出した土坑である。東西0.6m以上南北1.2m以上で、深さは0.2mである。

土師器片が出土しているが、小片であるため、時期は不明である。

##### 溝

S D 7 III-1 地区d・e12区で検出した溝である。幅は0.5m、深さは0.3～0.5mである。S D 6 から約6mの間隔をおいて平行に走る。S D 6 とは埋土が同じ、かつ規模も同程度である。

出土遺物は土師器小片のみであるため、時期は不明である。

S D 14 III-3 地区i・j24で検出した溝である。幅は0.9～1.4mで、深さは0.2mである。

出土遺物は土師器小片のみであるため、時期は不明である。

（五嶋・小林）

遺構番号	調査時	調査区	地区(グリッド)	規模(m)	深さ(m)	時期	備考
1	S D 1	I - 1	a 1~9, b 1~9				欠番
2	S D 2	I - 1	a 12~15, b 12~15				欠番
3	S D 3	I - 2	a 26~56, b 26~56				欠番
4	S D 4	I - 1	a 19~25, b 19~25				欠番
S D 5	S D 5	III - 1	d 7 ~11, e 7 ~11	幅1.2~	0.15~0.3	平安後期	
S D 6	S D 6	III - 1	d 10, e 10	幅0.6	0.6	鎌倉	
S D 7	S D 7	III - 1	d 12, e 12	幅0.5	0.3~0.5	不明	
S Z 8	S Z 8	III - 2	d ~ h 14	幅13	0.05~0.1	鎌倉	
S D 9	S D 9	III - 2	h 14	幅0.4	0.25	鎌倉	
S K 10	S K 10	III - 2	i 14	0.5×1.3以上	0.2	不明	
S D 11	S D 11	III - 3	i 19・20	幅2.5	0.2	室町	
S D 12	S D 12	III - 3	i 22・23	幅0.8~1.2	0.4	鎌倉	
S K 13	S K 13	III - 3	i 23・24	1×1.5以上	0.1	不明	
S D 14	S D 14	III - 3	i 24, j 24	幅0.9~1.4	0.2	不明	
S D 15	S D 15	III - 3	i 25, j 25	幅3.2	0.4~0.8	室町	
16	S D 16	III - 3	i 26・27, j 26・27				攪乱 欠番
S K 17	S K 17	III - 3	i 26	0.6×1.2以上	0.1~0.2	不明	

第1表 遺構一覧表

## IV 遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にし  
て10箱である。中世の遺物が中心であるが、弥生時  
代や古墳時代、近世の遺物等も出土している。

以下、地区毎に記述する。

### 1 弥生時代・古墳時代

1は弥生土器の広口壺である。口縁部外面に凹線文、内面に波状文が見られる。伊勢第IV様式くらいのものである<sup>3</sup>。2は弥生土器の細頭壺である。口縁部は受口状を呈し、頭部下方に刺突痕が見られる。伊勢第IV-1~2様式のものと考えられる。3は壺の頭部で、弥生土器と思われる。4は弥生土器の甕である。口縁部外面に刺突痕、体部外面に柳描横線文が認められる。いわゆる近江系甕である。伊勢第V-5様式くらいのものである。5~6は高杯である。5は弥生土器で第V様式、6は古墳時代前期でもよからうか。

### 2 I 地区

調査時にSD 1~4からの出土と表記していた遺  
物は、SD 1~4を遺構ではないと判断したため、  
出土した層名「にぶい黄橙色シルト」で分類することとした(第4~6図15層)。また褐灰色シルト中  
出土と表記していた遺物も、整理の結果にぶい黄  
橙色シルトからの出土と分類する。

### にぶい黄橙色シルト土器群1 (7~8)

7は土師器皿で、手づくねのもの。器高が低く、  
胎土は灰白色を呈する。12世紀後葉くらいのもので  
ある<sup>3</sup>。8は山茶椀である。内面には炭化物の付着が  
見られる。渥美産のもので、藤澤良祐氏による編年  
の第6型式のものである<sup>3</sup>。

### にぶい黄橙色シルト土器群2 (9~36)

9~12はロクロ土師器皿である。口径8cm前後の  
小皿と口径15cm前後の皿がある。いずれも12世紀後  
葉~13世紀前葉のものである<sup>3</sup>。

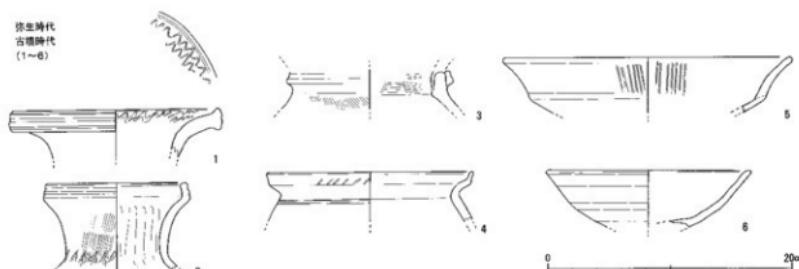
13~14は土師器小皿で、こちらは手づくねである。  
いずれも器高が1cm強と低いもので、胎土は浅黄橙  
色を呈する。15は土師器鍋である。南伊勢系のもの  
で、伊藤裕偉氏による編年の第1段階a型式のもので  
ある<sup>3</sup>。

16~19は山皿で、いずれも渥美産のもので、第6  
型式くらいのものである。20~35は山茶椀である。  
いずれも渥美産のもので、32~35には墨書きが見られ  
る。34~35には底部外面に「×」の墨書きがある。  
32~33の墨書きは割れもあり、解説不能。

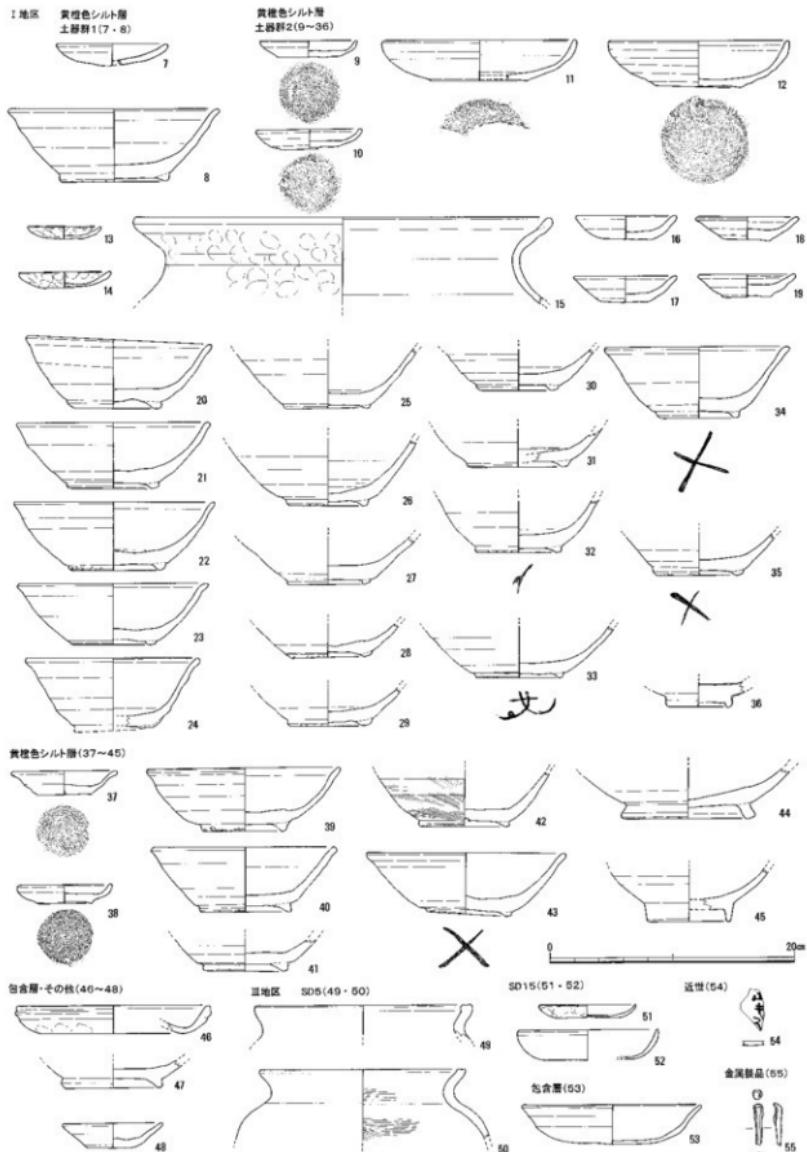
36は青磁碗の底部で、龍泉窯系のものである。12  
~13世紀代のものであろう<sup>3</sup>。

### にぶい黄橙色シルト (37~45)

ここにとりあげた遺物は、土器群1・2ではない  
にぶい黄橙色シルト層から出土した遺物である。



第11図 出土遺物実測図① (1:4)



第12図 出土遺物実測図② (1 : 4)

37～38は口クロ土師器の皿である。37は口縁部が外反するもので、38よりもやや古い年代に位置付けられる。12～13世紀のものである。

39～43は山茶椀である。いずれも渥美産のもので、第5～6型式のものである。42の外面にはハケメ状のものが見られる。43には底部外面に「×」の墨書きがある。

44は陶器練鉢である。渥美産のもので、粗粒感が認められる高台は外側に張り出している。12世紀後半頃のものか。45は白磁碗の底部である。高台がほぼ垂直のものである。太宰府分類V類と思われる<sup>⑤</sup>。  
包含層・その他（46～48）

46は土師器の皿である。口縁部が厚手でやや内彎化して立ち上がる。12～13世紀代のものと考えられる。47は山茶椀である。胎土から尾張産の可能性がある。48は山皿で、渥美産のものである。第6型式頃と考えられる。

### 3 III地区

#### S D 5 (49～50)

49～50は土師器甕である。南伊勢系鍋の（仮）A段階よりもやや古い様相を持っている。11～12世紀代くらいのものであろう<sup>⑥</sup>。

#### S D 15 (51～52)

51は土師器小皿で、南伊勢系A形態のものである。浅黄橙色を呈する。南伊勢IVa期のものである。15世紀後葉にあたる<sup>⑦</sup>。52も土師器皿で、南伊勢系B形態のものである。橙色を呈し、南伊勢IVa～b期のものである。

#### 包含層（53）

土師器皿である。口径は14.6cmとやや大きめのもので、口縁部が大きく外反する。12世紀代のものである。

### 4 その他

#### 近世（54）

陶器片の体部に墨書きが見られる。墨書きの内容は不明。

#### 金属製品（55）

鉄製品の釘である。長さは3.4cmで、断面は方形であることが確認できる。II地区の灰色粘土層からの

出土である。

（小林）

### 〔註〕

- ①上田安生「伊勢・伊賀地域」（加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社、2002年）。
- ②伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」（『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』、土器・陶磁器編年研究会、2004年）。
- ③以下山茶椀については下記の文献に掲った。  
藤原良祐「山茶梅研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県歴史文化財センター、1994年）。
- ④尾野清裕「中世食器の地域性－東海・濃飛」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、国立歴史民俗博物館、1997年）。
- ⑤以下土師器鍋については下記の文献に掲った。  
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一論議」（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）。
- 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と煮そ のデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）。
- ⑥「買易陶磁器（中世前期）」（概説中世の土器・陶磁器）、真陽社、1995年）。
- ⑦『太宰府秦坊跡』XV（太宰府市教育委員会、2000年）。
- ⑧新田洋「平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」（『三重考古学研究』I 三重考古学談話会、1985年）。
- ⑨伊藤裕偉「土師器皿類の変遷」（小林俊之・竹田憲治・伊藤裕偉「北島氏船跡9～多気北島氏遺跡第26次調査・北島氏船跡総括編一』、美杉村教育委員会、2005年）。

報告番号	実測番号	種類	品種など	調査区	地区(グラフ)	出土位置・基盤	計測値(cm) 目録 基盤	調整・技法の特徴	地土	構成	色調	段位	備考
内: 横ナデ・横吹ナデ・スギモ、 外: 四方丸・ミカゲ	粗(3mmの砂粒を 多く含む)												
1 010-04	弥生土器	便	Ⅲ-3	j 25	S-D15	16.8			泥	10YR 6/4	浅黄橙	4/12	
2 009-02	弥生土器	直	Ⅲ-q 5	明黄褐色 (シルバ)	11.4			内: 横ナデ・ナデ 外: 横ナデ・ハケヌ・刷毛	やや粘(1~2mm)	やや 良	内: 7.315/1 黄褐色 外: 2.315/2 地白	□縫隙3/12	
3 008-03	弥生土器	直	I-1	b 10	包含層			内: ハタメ・ナデ 外: 横ナデ・ハケヌ	やや硬	やや 良	10YR 4/3 浅黃橙	小古	
4 009-01	弥生土器	便	I-1	a 15	包含層	16.8		内: 横ナデ・ナデ 外: 日本模・刷毛・ 刷毛模様・ナデ	やや硬	やや 良	10YR 4/2 地白 2.315/1 地白 新規3/5/2 略硬	□縫隙1/12	
5 009-05	弥生土器	高杯	Ⅲ-e 6	浅黄色	23.4			内: ハテ・ガキ	やや硬	やや 良	7.315/6/4 浅黄橙 10YR 6/2 地白	□縫隙1/12	
6 010-05	土器部	高杯	試掘場 137	S-D埋土	16.6			内: 横ナデ	粗(1~3mmの砂粒) 細(5mmの小石含む)	泥	10YR 6/3 浅黃橙	3/12	
7 009-02	土器部	直	I-1	a 2		8.8	1.9	内: 横ナデ・ナデ 外: 横ナデ・土器脚1	素(0.5mmの砂粒上 1.5mmの小石含む)	良	2.315/2 地白	4/12	
8 005-04	陶器	山系純	I-1-a 2	近赤褐色 (シルバ)	17.0	5.9	高台積 6.6	内: ロクロナデ 外: 収付高台ナデ・あ切痕、 斜削痕	粗(1.5mm以下の砂粒と 1.5mmの小石含む)	良	内面: 9E/0 地白 外面: 9E/1 地白	8/12	内面に崩化物付着
9 009-04	ロクロ 土器部	直	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	8.0	1.35	直理5.0	内: ロクロナデ・糸切痕	粗(1.5mmの砂粒上) 1.5~2.5mmの小石含む)	良	10YR 6/3 浅黃橙	9/12	
10 006-01	ロクロ 土器部	直	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	8.48	1.48		内: ロクロナデ・糸切痕	やや粗(1~2mmの砂粒と 2~3mmの小石含む)	良	内面: 7.315/2 地白 外面: 7.315/4 に伝・壁	10/12	
11 004-05	ロクロ 土器部	直	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	15.6	3.3	直理8.0	内: ロクロナデ・糸切痕	やや粗(1~2mmの砂粒と 2~3mmの小石含む)	良	10YR 6/4 に伝・壁	□縫隙1/12 直縫4/12	
12 005-03	ロクロ 土器部	直	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	14.7	3.75	直理7.0	内: ロクロナデ・糸切痕	やや粗(1mmの砂粒と 2~4mmの小石含む)	良	10YR 6/2 地白	10/12	
13 003-07	土器部	直	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	6.0	1.1		内: ナデ・オサニ	やや硬	良	10YR 6/3 浅黃橙	6/12	
14 003-06	土器部	直	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	7.5	1.3		内: ナデ・オサニ	やや硬	良	10YR 6/3 浅黃橙	8/12	
15 004-01	土器部	直	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	34			内: 横ナデ・ナデ・工芸ナデ、 外: 横ナデ・オサニ・ナデ	粗(1mmの砂粒多)	泥	内面: 10YR 7-2 に伝・直縫 外面: 7.315/1 地白	□縫隙3/12	
16 005-07	陶器	山底	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	8.1	1.95		内: ロクロナデ・ 高台ナデ	粗(1.5mmの 砂粒含む)	良	2.315/1 地白	11/12	
17 005-06	陶器	山底	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	8.3	2.15		内: ロクロナデ・ 糸切痕のナデ	粗(1.5mmの砂粒少 1.5mmの小石含む)	良	2.315/1 地白	11/12	
18 002-03	陶器	山底	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	8.0	1.9	直理5.6	内: ロクロナデ・糸切痕	粗(1mm以上の 砂粒含む)	良	BT7/1 地白	完形	内面に焼き跡あり
19 001-06	陶器	山底	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	7.6	1.8	直理5.6	内: ロクロナデ・糸切痕	粗(1mm以下の 砂粒含む)	良	BT7/1 地白	□縫隙3/12 内面深・ 自然剥離	
20 003-03	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	14.8	5.36	直理7.0	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・あ切痕	やや硬	良	BT7/1 地白	8/12	
21 005-01	陶器	山系純	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	15.8	5.36	直理6.8	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・あ切痕	粗(1mmの砂粒と 1.5mmの小石含む)	良	BT7/1 地白	10/12	内面蓋に 自然剥離
22 002-01	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	16.4	5.5	直理7.2	内: ロクロナデ・ 高台粘付ロクロナデ・ 糸切痕、糸張	やや粗(1mm以下の 砂粒含む)	良	BT8/1 地白	11/12	内面深・ 自然剥離
23 004-02	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)	15.4	5.0	直理6.6	内: ロクロナデ・ 糸切痕、 収付高台ナデ・あ切痕	やや硬	良	2.315/1 地白	□縫隙4/12	内面に墨付着
24 005-02	陶器	山系純	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)	14.0			内: ロクロナデ	粗(1mmの砂粒と 1.5mmの小石含む)	良	N7/0 地白	3/12	極めて低い表面 直縫隙
25 003-01	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)			直理6.6	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・あ切痕	粗	良	BT7/1 地白	直縫隙存	
26 003-04	陶器	山系純	I-1-a 18				直理6.0	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・糸切痕、 糸張	良	BT7/1 地白	直縫隙存		
27 002-02	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)			高台積 6.0	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・糸切痕、 糸張	粗(1mm以下の 砂粒含む)	良	BT8/1 地白	直縫隙存	内面薄く墨付着
28 004-03	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)			高台積 6.0	内: ロクロナデ・ 収付高台ナデ・糸切痕、 糸張	粗	良	7.315/1 地白	直縫隙4/12	
29 003-02	陶器	山系純	I-1-a 18	近赤褐色 (シルバ)			直理6.0	内: ロクロナデ・ 糸切痕、 糸張	やや硬	良	10YR 7/1 地白	直縫隙存	
30 001-04	陶器	山系純	I-1-a 17	近赤褐色 (シルバ)			高台積 5.4	内: ロクロナデ・ 高台粘付ロクロナデ	粗(1mm以下の 砂粒含む)	良	BT7/1 地白	直縫隙存	

第2表 遺物観察表①

報告 番号	実測番号	種類	基準など	調査区	地区 (グラフ)	出土位置・ 層位 (目録) 基層	計測値 (cm)	調査・ 採取の特徴	地土	施成	色調	残存度	備考		
								内・外	高台傾 度	その他の 特徴					
31	004-04	陶器	山系傾	I-1	a 18	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	高台傾 度 7.8	内・外: 収口ナダ、 見付高台ナダ、赤切版	やや湿	良	BT7/1 深白	遺部4/12			
32	003-05	陶器	山系傾	I-1	a 18	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	高台傾 度 6.6	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、赤切版、 斜削版	やや湿	良	BT7/1 深白	遺部6/12	遺部墨書き		
33	007-02	陶器	山系傾	I-1	a 17	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	高台傾 度 6.9	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版	湿	良	SB/9 深白	高台部4/12	遺部墨書き		
34	002-06	陶器	山系傾	I-1	a 18	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	14.7	5.9	6.0	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版	壁(1.5m以下)の 砂粒含む	良	BT7/1 深白	日縫隙4/12 遺部充てん	遺部墨書き
35	007-03	陶器	山系傾	I-1	a 17	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	高台傾 度 6.3	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版、斜削版	湿	良	SB/9 深白	高台傾注付	遺部墨書き		
36	002-04	青磁	灰	I-1	a 18	に高い黄 褐色、シルト 土層等 2	高台傾 度 6.0	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版	壁(1m以下)の 砂粒含む	良	SB/9 深白 壁2.5Y5/2 底色2.5Y5/2	遺部6/12	内部に墨書き風 の文字が見出され ています。		
37	006-05	ロクロ 土師器	灰	I-1	b 6	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	8.3	1.9	高台傾 4.4	内・外: コロナダ、 赤切版	壁(1~3m)の砂粒と 2~3mmの小石含む	良	日縫隙4/12 外壁7.BY7/4 に高い壁	3/12	
38	002-03	ロクロ 土師器	灰	I-1	a 18	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	7.6	1.5	4.8	内・外: コロナダ、 赤切版	やや湿(1.5m以 下)の砂粒	良	7.BY7/4 に高い壁	完形	
39	001-02	陶器	山系傾	I-1	b 15	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	15.7	5.1	高台傾 6.0	内・外: コロナダ、 高台傾注付ナダ、斜削	湿	SB/8 深白	日縫隙4/12 遺部充てん	内部薄く自然鉛	
40	001-01	陶器	山系傾	I-1	a 16	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	14.8	8.9	高台傾 度 8.0	内・外: コロナダ、 高台傾注付ナダ、赤切版	底(0.5m)の 砂粒含む	良	2.BY8/1 深白	日縫隙4/12 遺部充てん	
41	001-03	陶器	山系傾	I-2	a 33	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	底傾 6.3	内・外: コロナダ、 高台傾注付ナダ、赤切版、 斜削	壁(1.5m)の 砂粒含む	良	BT7/1 深白	遺部充てん			
42	001-05	陶器	山系傾	I-1	a 21	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	底傾 6.8	内・外: コロナダ、 高台傾注付ナダ、 赤切版、斜削	壁(1.5m以下)の 砂粒含む	やや 不良	内底 10BY6/2 に高い 壁 外壁 10BY6/2 底不良	遺部充てん			
43	007-01	陶器	山系傾	I-1	a 16	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	16.2	5.1	高台傾 度 6.9	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版、斜削	湿	良	SB/9 深白	日縫隙4/12	遺部墨書き
44	005-05	陶器	鍍錆	I-1	a 7	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	高台傾 度 5.5	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 赤切版、斜削	壁(1~3m)の砂粒と 2~3mmの小石含む	良	内底 5/7 深白 外壁 5/7 深白	3/12			
45	007-05	白磁	灰	I-1	a 20	に高い黄 褐色、シルト 色シルト	高台傾 度 6.8	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、 割り出し高台	湿	良	SB/9 深白	高台部4/12	大半部分白V型		
46	008-02	土師器	灰	I-1	a 16	包含層	15.6	2.3	内: 磁ナダ、ナダ、 外: 磁ナダ、ナダオナニ	やや 湿	10BY8/2 深白	日縫隙4/12	黑色擦れ有り、 黒粉有り		
47	007-04	陶器	山系傾	I-2	b 26	包含層	高台傾 度 7.5	内・外: コロナダ、 見付高台ナダ、赤切版	湿	良	SB/9 深白	高台傾4/12	黒粉有り		
48	008-04	陶器	山系	I-1	-	土系断面	8.0	2.0	内・外: コロナダ、 赤切版	湿	良	SB/9, T.0 BY8/2 深白	日縫隙4/12		
49	009-03	土師器	灰	Ⅲ-1	d 11	SD 5	16.6	内: 磁ナダ、ハケメ、 外: 磁ナダ、ナダ	やや湿(1~2m)	やや 良	10BY8/2 深白、 T.3BY5/2 基底 SBY7/4 に高い壁	日縫隙4/12			
50	009-04	土師器	灰	Ⅲ-1	d 11	SD 5	17.4	内: 磁ナダ	やや 湿	10BY8/3 浅黄壁	日縫隙4/12				
51	010-01	土師器	小瓶	Ⅲ-3	j 28	SD 18	7.7 ~8.3 ~1.3	内: ナダ、外: オサエ	壁(~2m)の 砂粒を含む	湿	10BY8/3 浅黄壁	充てん	南伊勢系A形瓶		
52	010-02	土師器	灰	Ⅲ-3	j 28	SD 18	11.4	内: 磁ナダ、ナダ、 外: オサエ、ナダ	壁(1m)の 砂粒を含む	湿	SBY6/2 壁 外壁SBY6/2 に高い壁	3/12	南伊勢系B形瓶		
53	010-03	土師器	灰	Ⅲ-1	d 12	トレンチ (D型)	14.6	3.3	内: 磁ナダ、ナダ、 外: 磁ナダ、オサエ、ナダ	壁(1m)の 砂粒を含む	湿	SBY6/2 壁 外壁SBY6/2 に高い壁	9/12		
54	008-06	陶器	不明	Ⅱ	e 6	包含層				湿	良	2.BY8/2 深白	小片	外部に墨書き	
55	009-01	鉄製品	鉄	Ⅲ	b 6	深白色 シルト	高さ3.4								

第3表 遺物観察表②

## V 調査のまとめ

### 1 魚見里前遺跡の旧地形

今回の発掘調査地点は、現魚見集落の東と南側の集落である。

このうちⅠ地区においては、褐色砂層まで掘削していくと、部分的に落ち込み状になっているところがあった。落ち込みの底部には還元土壌の灰色粘土が見られた。

この地区全体は低湿地として存在し、中世後期以降に褐色シルトが堆積したものと考えられる。しかし、にぶい黄橙色シルトでは、土器群1・2のように良好な遺物が出土する地点もあった。このため、土器群1・2は遺構であった可能性もある。

Ⅱ地区でも調査区全体に灰色粘土が見られることから、Ⅰ地区で言う落ち込み状の部分と考えられる。つまり、Ⅱ地区もⅠ地区と同様の低湿地であったと考えられる。

Ⅲ地区では、北半では褐色砂質土層上で遺構が見られた。南半では砂層・砂礫層上で遺構が見られた。このため、Ⅲ地区の北部は沖積地の中の微高地になっていることがわかる。この微高地は、現在の魚見集落に続くものと想定される。

### 2 遺構・遺物について

Ⅲ地区的遺構では、平安時代末期～室町時代の遺構が見られた。小規模な溝が多いが、このうちSD5は調査区内においてはコの字形に見られ、なんらかの区画があった可能性も指摘できる。しかし、区画の内部には柱穴と評価できる遺構はなく、詳細は不明である。

遺物では、Ⅰ地区では土器群やにぶい黄橙色シルト層で12世紀代～13世紀前葉のものが出土した。出土遺物は、この時期のものが最も多く、魚見里前遺跡周辺の最盛期を示していると言えようか。

### 3 川島町・魚見町の集落遺跡

松阪市川島町・魚見町では、平成12年度より県営は場整備事業（機関下地区）などに伴い、3カ年に亘って発掘調査を行ってきた<sup>32)</sup>。3カ年の調査では、川島遺跡群のほか魚見下起遺跡、魚見里前遺跡がある（川島遺跡群は小字ごとでさらには「○○地区」との名称を付与している）。3カ年の総調査面積は8,000m<sup>2</sup>に及ぶ。その調査区のいずれもが幅2～3mの狭いものであったが、距離の長いトレーンチを入れている。ここでは、川島町・魚見町全体の遺跡の動向を見てみたい。

#### (1) 検出された遺構

川島・魚見の遺跡では、幅広い時期の遺構・遺物がある。各時期ごとに整理しよう。

**弥生時代** 遺構はないが、魚見里前遺跡で弥生土器の出土がある。溝・流路からの出土遺物であるため、魚見以南の上流に遺跡がありそうである。

**古墳時代** この時期も遺構はないが、川島遺跡群門前Ⅲ地区（以下「川島遺跡群」は省略）でローリングを受けていない前期の土器の出土があり、調査区以西に集落がある可能性が指摘されている。

**奈良時代** 東久保東浦Ⅰ地区で堅穴住居1棟が検出されている。この時期の遺構はわずかに見られるに過ぎない。

**平安時代** 奥垣内Ⅱ地区で溝等を、道場Ⅰ地区で墓と考えられる遺構を検出している。また、魚見里前遺跡Ⅲ地区で後期の溝が確認されている。今のところ上記に挙げた程度であり、遺跡の広がりとしてもわずかにあるに過ぎない。

**鎌倉時代** 明確な遺構では、門前Ⅰ地区で13世紀前半の石組井戸（S E 237）が、奥垣内Ⅳ地区・V地区で13世紀前半の溝が検出されている。また奥垣内Ⅱ地区では掘立柱建物（S B 82）も検出している。このほか魚見里前遺跡Ⅲ地区でも溝の検出がある。

この時期は、奥垣内地区や門前地区に集中して遺

構が見られる。前代よりも遺跡としての広がりや集落としての発展を推察できる状況である。

#### 室町時代 最も遺構・遺物の多い時期である。

注目できる遺構としては道場Ⅰ地区の掘立柱建物(S E40)や15~16世紀代の井戸(S E15・16・17)、奥垣内Ⅱ地区の土器鍋が多く出土した溝(S D58=奥垣内Ⅴ地区 S D279)や門前Ⅰ地区の15世紀後半頃の井戸(S E241)などが挙げられる。

各地点で検出例があり、それまで遺構がなかった塩角地区や魚見下起遺跡でも遺構が見られ、遺跡の広がりとしても最も広い。また、各遺構の時期を見していくと、室町時代の中でも15世紀後半~16世紀後半の遺跡として評価できる。

江戸時代 大半が溝や旧流路である。前代に比べ遺構数は激減しているため、集落の再編があったことも考えられる。また、門前Ⅳ地区の遺構は、Ⅱ章で触れたように調査区の北側に浄德寺跡伝承地があるため、その関連が考えられる。

**小括** 以上のように、川島・魚見では、遺跡の中心は、鎌倉~室町時代にある。集落として発展していくのは12世紀後半~13世紀前半である。その後、14世紀代の動向はよくわからないが、15世紀後半からまた遺構が見られる。そして16世紀後半では存在している。この傾向は、中世の集落遺跡ではよくある例である<sup>3</sup>。調査区の制限により遺構の全体については評価しにくいが、時期的な問題として、このようなことが言えようか。

### (2) 魚見御厨・御園の関連について

Ⅱ章でも述べたように、『神宮雜例集』には「魚見東御園」・「魚見新御園」の名が見られ<sup>4</sup>、御園は既に13世紀初期にはあったことが推察できる。

発掘調査では、12世紀後半~13世紀前半の遺構が多くなることがわかっている。この時期の遺構の例として、門前Ⅰ地区の13世紀前半の井戸(S E237)などが挙げられ、奥垣内地区・門前地区を中心に見られるようになってくる。このような遺構数の増加は、史料上に魚見の名が見られるようになると比例している。したがって、集落としての発展は御園に関連することが考えられる。奥垣内地区・門前地区で見つかった遺構は、魚見御園に関連する可能性

が十分にある。

Ⅱ章で触れたように、15世紀中葉~後半に再び史料上で魚見が見られる(『氏經卿引付』<sup>5</sup>、『内宮引付』<sup>6</sup>)。

15世紀後半に該当する遺構は多数あるため、これとの関連性が指摘できる。ただし、後述の宏徳寺との関連もあって、遺構と御厨・御園の関連は見えにくくなっている。

さて、御厨・御園については、一般的には荘園と同義で扱われるが、その実態は不明な点が多い。今回の川島・魚見での発掘調査では、その実態に迫るところまでの遺構には恵まれていないが、御厨・御園の登場と集落の成立は大きな関連を持っていそうであることは指摘できるだろう。

### (3) 宏徳寺の関連について

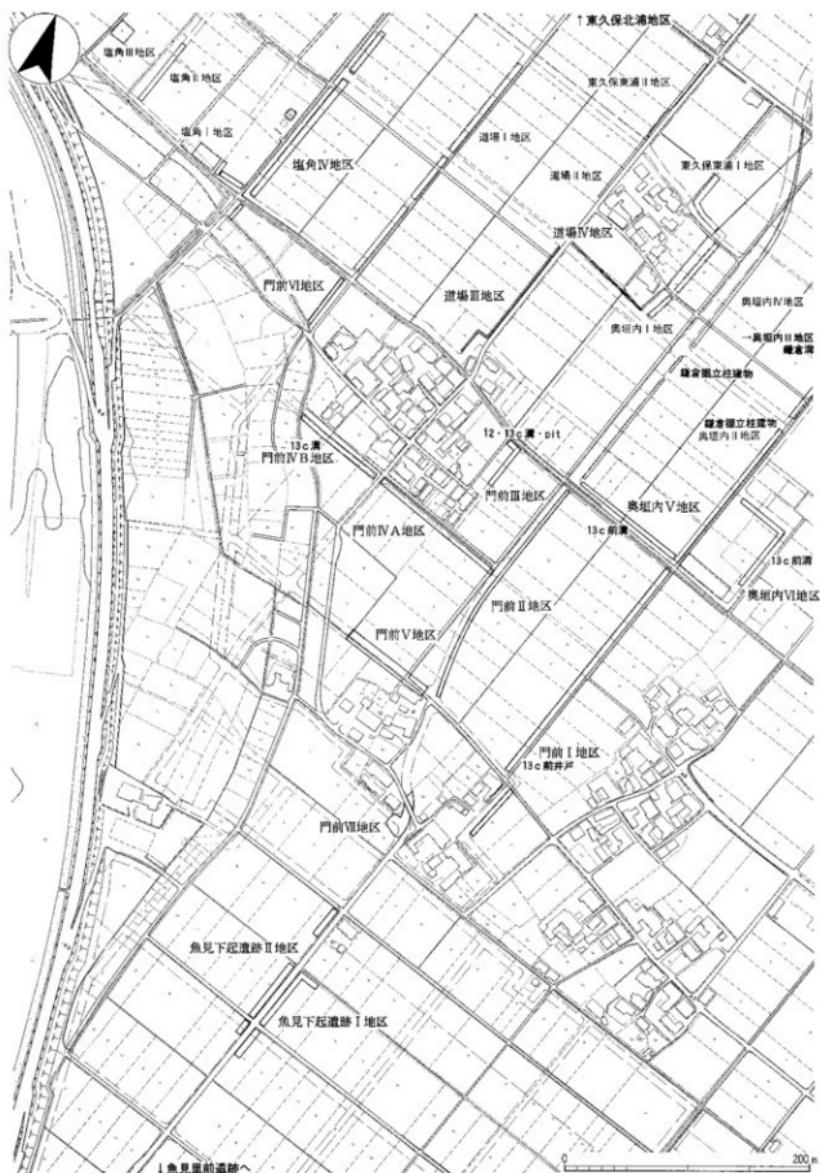
Ⅱ章でも触れたように、宏徳寺の登場する史料には『言繼卿記』<sup>7</sup>や『宮田宏徳寺旧記』がある<sup>8</sup>。

この『宮田宏徳寺旧記』では、貞治3(1364)年から応永25(1418)年までの史料が見られる。したがって、少なくとも14世紀中葉には宏徳寺は成立していることがわかる。この間、応永7(1400)年には、室町幕府将軍(足利義持)から祈願寺とする旨の書状が、また細川氏からの書状もあり、宏徳寺の寺格の高さが窺える。文書形式から北畠氏の書状と考えられるものもあり<sup>9</sup>、宏徳寺はこの地域の代表的な寺院であったと考えられる。

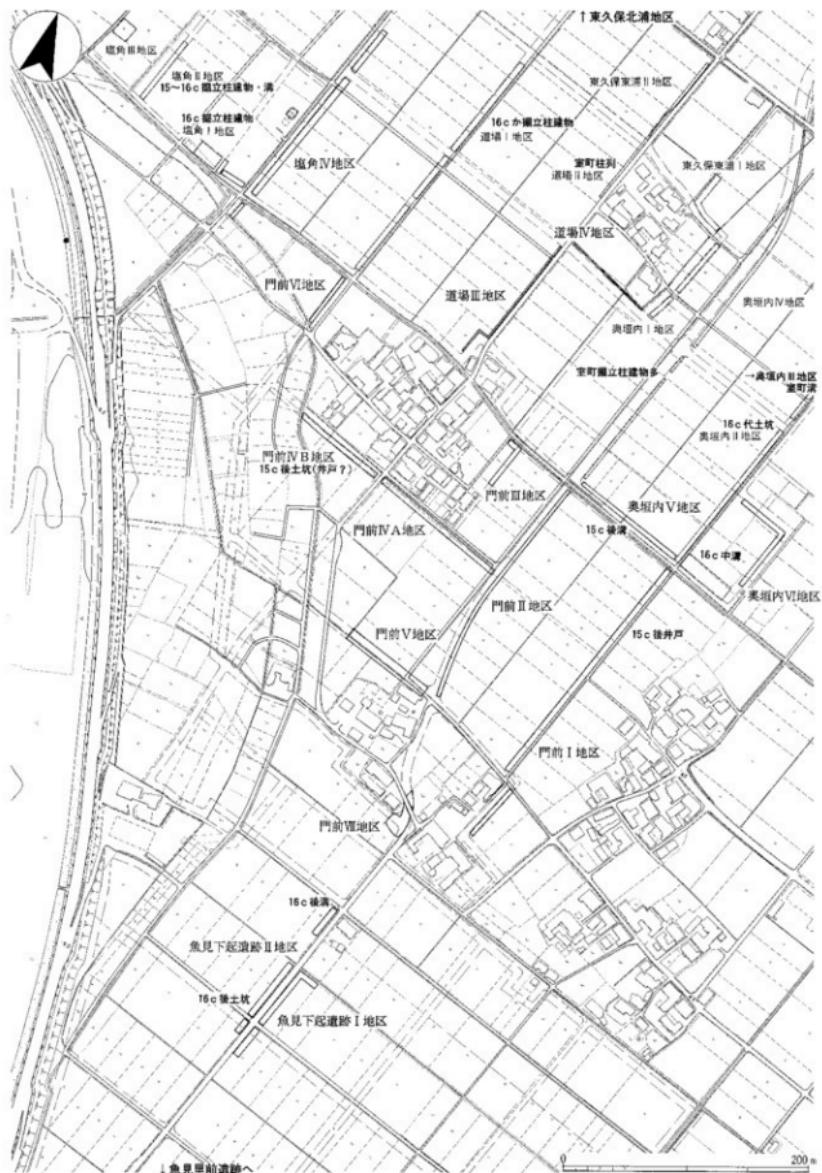
この『旧記』に登場する時期である14世紀中葉~15世紀前半の時期は、発掘調査では該当する遺構が見られなかった。したがって、この時期の宏徳寺について発掘調査からは何も言うことはできない。

一方、『言繼卿記』では永禄元(1558)年と永禄3(1560)年条に宏徳寺が見られる。したがって16世紀中葉の時期であるが、この時期は各地区で遺構が見られる。

川島町には、「道場」や「門前」のように寺に関連する小字が残されている。かつて、発掘調査の成果に加え、小字と地籍図を用いて道場地区に宏徳寺を比定した<sup>10</sup>。発掘調査において道場・門前地区を中心にして16世紀代の遺構を確認している。調査区が限られていたために、遺構の点から宏徳寺を限定するのは難しいが、やはり道場地区を中心に宏徳寺があると



第13回 鎌倉時代の遺構の拡がり（1：4,000） 明朝：平成13年度調査区 ゴシック：平成12年度調査区



第14図 室町時代の遺構の拡がり（1：4,000） 明朝：平成13年度調査区 ゴシック：平成12年度調査区

考えるのが良いだろうか。また、門前地区は、当時の街道との関係を考えると<sup>⑤</sup>、宏徳寺の門前という考えが良いのであろう。

#### (4)まとめ

全体として調査が断片的なものであるため、不明な点が多い。しかし、御厨・御園に関連すると思われる遺構を確認し、宏徳寺に該当する時期の遺構を確認した。このことは、実体がよくわからっていない御厨・御園について、また地域に伝わる中世寺院の一端が判明したことは大きな成果であろう。

また、流路の検出や試掘の結果からは、旧地形の推定もでき<sup>⑥</sup>、柳田川沿岸域のかつての状況を如実に示す結果となった。川島町や魚見町といった地名の成立を考える上でも大きな成果を挙げたということができるだろう。  
(小林)

#### (註)

- ①小畠学・小林俊之『川島遺跡群（第1次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）。
- ②柴山圭子『川島遺跡（第2次）ほか発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2004年）。
- ③『東海の中世集落を考える』（第9回東海考古学フォーラム、2002年）。など
- ④『群書解題』一上。
- ⑤『氏経御引付』（『三重県史 資料編 中世1（上）』三重県、1997年）。
- ⑥『内宮引付』（『三重県史 資料編 中世1（上）』三重県、1997年）。
- ⑦『言叢釋記』（続群書類叢刊行会、1998年）。
- ⑧『宮田宏徳寺古記』（『松阪市史第3巻 史料編古代・中世』松阪市、1980年）。
- ⑨小林秀氏の御教示による。
- ⑩前掲⑤文献。
- ⑪伊藤裕志「中世後期における斎宮の交通路と関所」（『斎宮歴史博物館研究紀要』12、斎宮歴史博物館、2003年）。
- ⑫柴山圭子「川島遺跡周辺の地形を考える」（『研究紀要』第14号、三重県埋蔵文化財センター、2005年）。

# 写 真 図 版



写真図版 1



I-1・2地区 調査区全景（北から）



I-1地区 調査区全景（南から）

写真図版 2



I 地区 グリッド a 2～a 3付近調査区西壁土層断面状況（南東から）



I 地区 土器群 1 遺物出土状況（東から）



I 地区 土器群 2 遺物出土状況（北東から）



I 地区 土器群 2 遺物出土状況（南西から）

写真図版 4



I-3地区 調査区全景（南から）

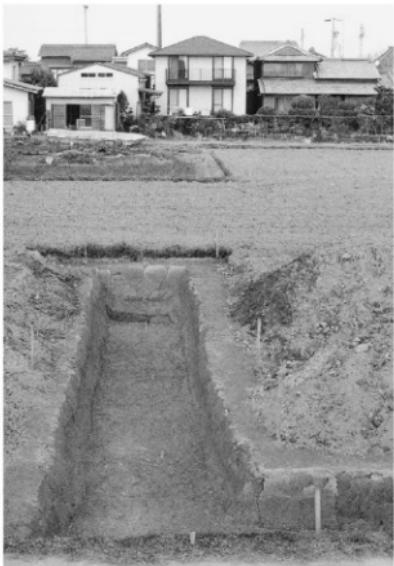


I地区 グリッド a47～a48付近調査区西壁土層断面状況（東から）

写真図版 5



II地区 東部調査区全景（東から）



II地区 西部調査区全景（南から）



II地区 グリッドn 6付近調査区南壁土層断面状況（北から）

写真図版 6



III-1地区 調査区全景（北から・右上は現魚見の集落）



III-2地区 調査区全景（西から）

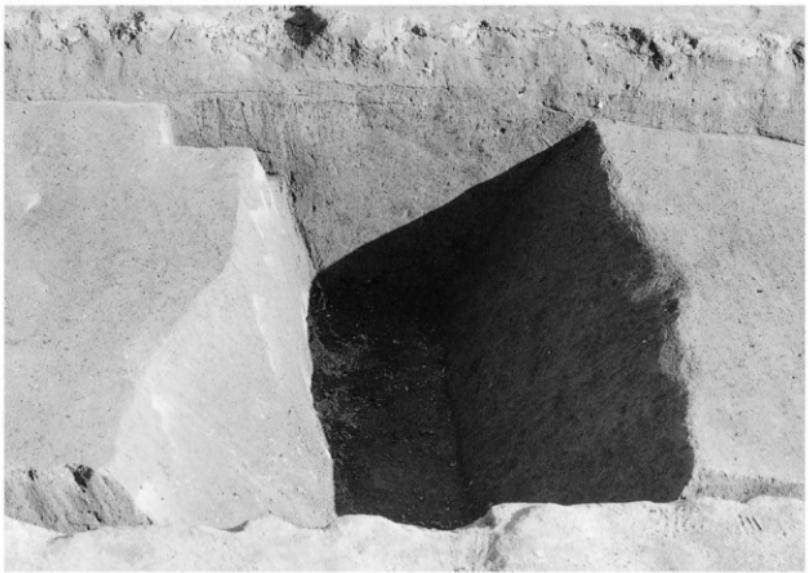


III-3地区 調査区全景（北から）

写真図版 7



III地区 SD 5・SD 6 (西から)



III地区 SD 7 (西から)

写真図版 8



III地区 SD 11 (北西から)



III地区 SD 12 (西から)

写真図版 9

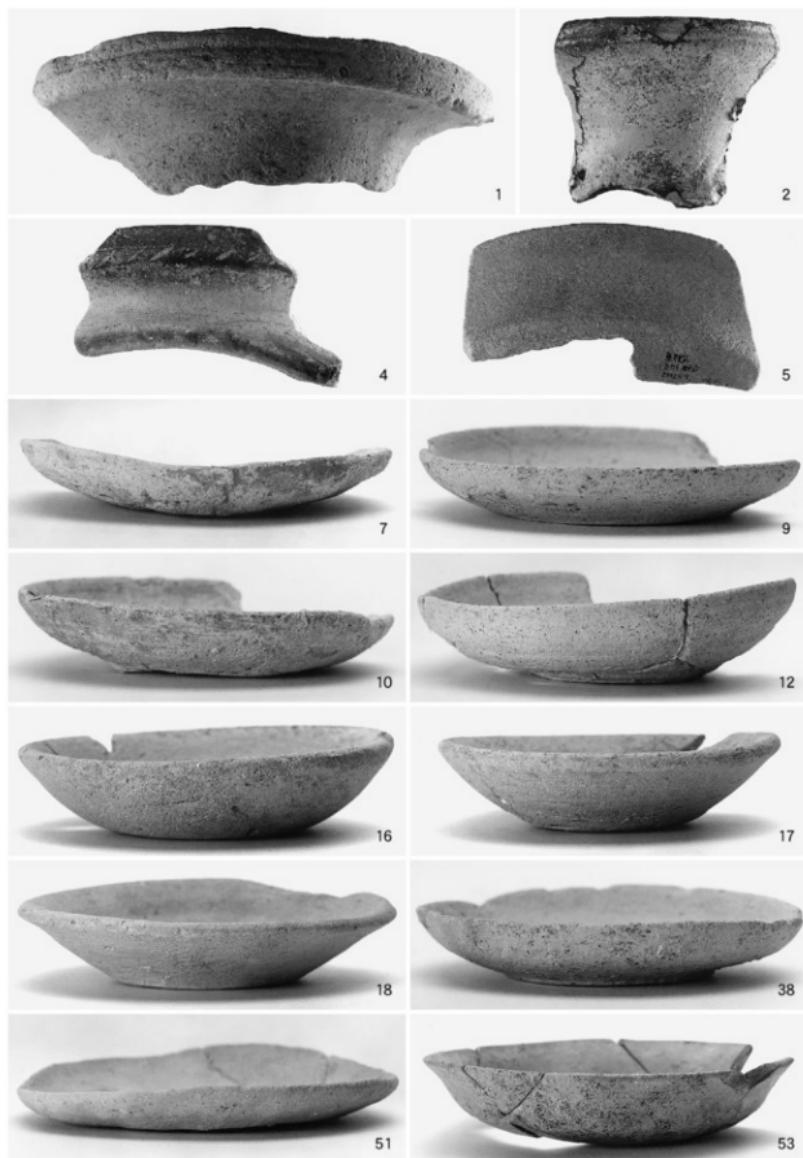


III地区 SD 15 (西から)



III地区 SK 10 (北西から)

写真図版10



遺物写真①

写真図版11



遺物写真②

## 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告277

## 魚見里前遺跡発掘調査報告

2006年11月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 御山文印刷

---